

ポピュラー音楽

反抗と消費文化の落とし子

橋爪大三郎

東京大学文学部教授
社会学

世界的なビッグヒットが続々生まれ、世界中のティーンエイジャーが同一のアルバムに熱狂する。そんな現象が、ビートルズで当たり前に変わった。革命的な変化だった。

一九六二年のデビューから一九七〇年の解散まで、六〇年代に君臨した英国の四人組バンド、ビートルズは、ポピュラー音楽の歴史をぬり替えた。そしてポピュラー音楽を、大衆文化の主役の座に押し上げた。

学生に共通の感覚

クラシックでもなく、伝統音楽、民族音楽でもない。流行りの曲として人びとの間に生まれ、ひと時親しまれたあと、やがて忘れ去られていく。大昔からポピュラー音楽は、そうしたものだ。それが二十世紀になると、ラジオやレコードなど新しいメディアの登場により、流行がますます大規模になっていった。メディアは、何億という人びとに同じ音楽を聴かせ、時代の共通体験を作りだす。美術や文学にくらべて複製が簡単で値段の安い音楽の流行が、大衆文化の先頭を走ったのは当然だ。

それでも戦前、メディアを通じた音楽はまだ弱体だった。ラジオは音質が悪く、レコードは高価だ

った。いい音を聴きたければ、バンドの生演奏しかなかった。だからイタリア人はカンツォーネ、フランス人はシャンソン、アメリカの黒人はブルースを口ずさむといった、民族、階層ごとの色分けが健在だった。

戦後、録音テープや四十五回転レコード（ドーナツ盤）が登場して、ジュークボックスやラジオのヒットパレード、テレビの音楽番組が流行音楽の主流になっていく。空輸されたドーナツ盤がラジオから流れ、数週間遅れで日本でもアメリカのヒットチャートを追えるようになった。こうして加速した、最新流行に迫ろうとする渴望のエネルギーが、六〇年代に爆発する。

六〇年代をまず特徴づけるのは、世界同時多発的な学生叛乱である。日本では全共闘が猛威を振るい、アメリカではベトナム反戦運動、欧州では学生叛乱の嵐が吹き荒れた。中国文化大革命の紅衛兵を、これに加えてもよいかもしれない。

これは冷戦と、テレビと、高度経済成長の副産物である。

長引く冷戦で、米ソに対する抑圧感、不信感が広がった。正面の敵と衝突できないのなら、無理で

ビートルズ

英リヴァプール生まれの四人のロックグループ。ジョン・レノン（一九四〇—八〇）が作ったアマチュアのグループにポール・マッカートニー（四一—）、ジョージ・ハリスン（四二—）が加わり、六二年リンゴ・スター（四〇—）の参加でメンバーが確定。デビュー後、大衆的ヒーローとして世界中の若者を魅了した。六七年設立した会社「アップル」の不振を経てチームワークが次第に乱れ、七〇年解散した。

● 鄧麗君（テレサ・テン）一九五二—一九九五
台湾の人気歌手から七四年日本デビュー。米留学を経て、東南アジアで幅広く人気を集め、八四年再来日。『恋の流るる身をまかせ』などをヒットさせた。

● 崔健（一九六—）
北京出身。音楽家の家に育ち、トランペット奏者の傍ら、八四年にロックバンドを結成。中国の若者にカリスマ的な人気をもつ。

第一部・大衆の登場

074

ポピュラー音楽

075

も自国の政府や大学に抗議するしかない。急速に変貌しつつある世界に追いつけない、旧態依然たる体制を、学生は法や思想によらない直接行動で攻撃する。それが同時代に直結するという感覚をメディアが増幅し、同時多発的な叛乱を誘発した。

開拓者ビートルズ

港町リヴァプールは、ブルースなどの黒人音楽も流れる場所だった。労働者の家庭に育った高校のバンド仲間、ジョン・レノンとポール・マッカートニーは、ジョージ・ハリスンとリンゴ・スターを加えてビートルズを結成。まず地元で人気に火がついたあと、自作曲「ラブ・ミー・ドゥ」で幸運なレコードデビューを飾る。空前絶後のビートルズ・ブームの幕開けである。

レノン・マッカートニーのヒット曲の数は、単純なロックンロールのコード進行や曲想をはみ出しており、もつと自由な音楽表現であるロックへの道を開いた。主演映画『ビートルズがやって来るヤァ! ヤァ! ヤァ!』は、今日のプロモーション・ビデオの原型だ。彼らの行く先々を十代の少女たちが追いかけた。髪型や服装、演奏スタイルを皆がこぞって真似し、新しいファッションとして定着した。モノラルステレオ→8トラック→フルトラック多重録音という最新技術を、まっ先に取り入れたのも彼らだった。自作自演のシンガー・ソングライターは、ビートルズ以降当たり前となった。「サージエント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」は、ヒット曲の寄せ集めにすぎなかったLPを、一個の世界に創造してみせ、アルバム概念を確立した。「オール・ユー・ニード・イズ・ラブ」の演奏は、衛星を通じて全世界に同時テレビ中継された。彼らの巨大な足跡ぬきに、

初の主演映画『ビートルズがやって来る ヤァ! ヤァ! ヤァ!』が公開され、日本でもビートルズの人気がブレイクした一九六四年秋、既にロンドンで彼らに出会っていた若手出身の少年がいた。のちの直木賞作家高橋克彦である。

ポピュラー音楽

「私はその年、まだ高校在学中だったが、大学生の従兄がヨーロッパ旅行をするという計画に便乗して春からヨーロッパを転々としていた。旅行の目的は憧れのビートルズに会うこと。

（無謀な願いだと笑われそうだが、その当時、日本でのビートルズ人気はさほどでもなかった。沸騰したのは前述の映画が公開されて以来のことだ。私のクラスにもビートルズのファンなんて二、三人しかいなかった。だからこそ会えるのではないかと大胆な願いを抱いたのだ。あの時代に高校生が海外旅行するのは珍

この人たちの証言

高橋克彦

「日の丸に願い込めた高校生」

そして、ロンドンに到着した九月末のある日、高橋少年は、「あらかじめこちらの願いを翻訳した長い訴状」を持ってファンクラブを訪ねた。応対に出た青年は、この珍客当来を

しい。ビートルズだってそれを聞けば面白がって会ってくれるのではないのか? しかも日本人のファンというの減多にないはずである。こちらなりの成算もあった。

「目立つように胸に日の丸を縫い付けた赤いウインドブレーカーを着ていた」高橋少年にまず最初に気付いてくれたのはポールだ。続いてジョンも、びっくりした顔でウィンクしてくれた。演奏が終わると、例の青年から、ステージに降りようと誘われた。

「ビートルズはステージで女の子たちに囲まれていた。青年が声を張り上げる。ジョンが振り向いた。胸の日の丸を認めてジョンは笑った。リンゴ・スターやジョージ・ハリスンもサインの手を休めて私になにか話しかけた」

高橋少年は、この時ほど英語が話せないことを悔やんだことはなかった。

第一部・大衆の登場

076

ポピュラー音楽

077

二十世紀後半のポピュラーカルチャーは語れない。

ステレオやラジカセが一人一台の時代となり、潤ったのはアメリカの音楽産業だった。アメリカの消費文化は、六〇年代反体制のエネルギーを吸収してひと回り大きくなり、第三世界や共産圏にも浸透していく。ベルリンの壁を打ち壊したのも、消費文化と自由への魅力だった。

ポピュラー音楽は、空間の隔たりや体制の違いを越えて、人びとを共通の感情に結びつける力がある。そんなもうひとつの例を、鄧麗君（テレサ・テン）にみる事ができる。

ロックは中国へ？

一九七九年に改革開放が始まるまでの中国大陸では、ポピュラー音楽は腐敗した資本主義文明の象徴、禁止も同然の扱いだった。恋愛や異国への憧れなど人間らしい感情は、ぜいたく品だった。そんな渇き切った人びとの心に、台湾で生まれ育った鄧麗君の語りかけるような歌声がしみ通っていく。テレサの父親は、大陸から台湾に渡った国民党員。彼女の恋の歌は、兩岸に分かれ世界に散らばった中国系の人びとの、交流のネットワーク（華人経済圏）形成をうながすものとも言えた。テレサに込めるかのように、中国に偉大なロック・アーティストが現れた。崔健（ツイジェン）である。

崔健は、中国初のシンガー・ソングライター。八〇年代半ばに、中国伝統の旋律を力強いビートに乗せた「一無所有（俺には何もない）」で衝撃的に登場。若者の圧倒的な支持をえた。天安門事件の学生たちが彼の曲を愛唱したせいも、当局はロックを警戒し、演奏会も満足に開けない。いろいろ苦勞しながらも、彼は中国の現実に立ち向かう気骨のある姿勢を貫いている。

先進国のロックは、商業主義にのみ込まれ、反抗も単なるポーズにすぎない。コンサートも管理されて儀式と化し、ロックは伝えるべきメッセージを失ってしまった。そんな困難な状況のなか、本物のロックがまだ可能と思えるのが中国なのだ。

いっぽう日本は、アメリカにつぐ世界第二の音楽市場に成長した。カラオケとウォークマンを発明し、ポピュラー音楽は若者の日常と不可分に溶けあっている。歌謡曲は解体、演歌は衰退し、世界中の音楽を器用に真似た国産ポップスが街にあふれている。

残念なのは、こうした日本のポピュラー音楽で、世界で聴かれるものが少ないこと。これは、日本の若者が内閉し虚弱になっていることと何か関係があるかもしれない。消費社会というかたちの新たな閉塞とマンネリをつき破る、パワーのある才能がそろそろ登場してもよいころだ。

おまけ

公明新聞 2001年1月15日

「教育改革」論議を考えるためのブックガイド

際立つ「学力低下」への危機感

硬直した「大人のまなざし」に注文も

一九九八年に社会経済生産性本部が出した「教育改革に関する中間報告書」は「大学入試の廃止」を打ち出したことで話題を呼んだ。大学が大衆化した現在では入試には意味がないとして、廃止したうえで学生定員の廃止や成績が基準に満たない者へのキックアウト制（留年・中退）の導入を提案している（この改革案は堤清二・橋爪大三郎共編著『選択・責任・連帯の教育改革【完全版】として出版）。この改革案の起草の中心になった東工大教授（社会学）の橋爪大三郎氏は『幸福のつくりかた』（ポット出版 一九〇〇円）【写真】の第一章「幸福な学校」で噛み砕いた形で「教育改革の基本的な考え」



「小・中学校の改革」「高校の改革」「大学の改革」について論じている。

構造主義

橋爪大三郎

【記号】の分析と脱「形式論理」

東京大学文学部教授
社会学

二十世紀後半の思想界は、構造主義を軸に動いたと言ってもよい。現代思想と言えはふつう構造主義、そしてポスト構造主義を意味する。

「構造主義（ストラクチャリズム）」という奇妙な名前の思想がフランスに登場したのは、一九六〇年ごろ。落ち目のマルクス主義と入れ代わり、だんだん人びとに浸透し、八〇年代には最も有力な思想となった。心理学のJ・ラカン、歴史学のM・フーコー、哲学のL・アルチュセル、記号学のR・バルト、人類学のC・レヴィ・ストロースらが、構造主義の有力メンバーである。レヴィ・ストロースの仕事を中心に、構造主義とは何だったかをふり返ってみよう。

「未開」は無根拠

レヴィ・ストロースは、ブラジル奥地の原住民などこれまで「未開」とされてきた社会の親族構造や神話を調べ、そこに構造（＝必ずしも意識できない数学的な秩序）が隠されているのを発見した。たとえば、オーストラリアの原住民が結婚相手を決めるための規則は、どういうわけか、現代数学の「群」の構造をそなえている。となれば、人間の精神はだんだん進歩していくというより、はじめから完成していると考えたほうがいい。人間・社会が進歩すると考える近代主義、歴史の発展法則を根

本に据えるマルクス主義とはまったく違った発想、すなわち構造主義の誕生である。

構造主義は、思想界に衝撃を与えた。なぜなら、西欧の近代資本主義社会も、人類学者が扱う「未開」社会も、同じ人間精神の所産であり、価値の優劣はつけられない。それなのに西欧が非西欧世界を遅れたもの、劣ったものとみなし、植民地にしたりするなど何の根拠もないことになるからである。構造主義のアイデアは、どのように生まれたのか？ レヴィ・ストロースは、人類学の研究を進めているときに、言語学のR・ヤコブソンと知り合い、二十世紀初めの思想家F・ソシュールの言語思想を詳しく紹介してもらった。そして、言語を分析する方法を、親族や神話や社会の研究に応用してみたかどうかと着想した。これがうまく行って、レヴィ・ストロースの構造人類学が生まれ、バルトやラカンといった人びとの仕事にもつながっていく。構造主義は、人間の生み出したものすべてを、言語と同じく記号のシステムとみなし、それをなるべく形式的に取り扱うという方法をもって

ポスト構造主義

さて、構造主義が広まるにつれ、その限界に不満を抱く人びとも現れてきた。歴史や社会の変化を

レヴィ・ストロース（一九〇八）

一九三五年ブラジルのサンパウロ大学に講師として赴任し、南米の原住民を調査した。第二次大戦でフランスに帰国し、応召したがドイツ軍に敗れ、ユダヤ系のため危険を避けて米国に亡命。戦後パリに戻り、五九年コレージュ・ド・フランス教授に就任した。親族の研究や神話の構造分析により構造主義人類学を確立し、現代思想に大きな影響を与えた。

フーコー（一九二六～八四）

高等師範学校を卒業後、心理学や精神医学を学び、一九七〇年からコレージュ・ド・フランス教授を務めた。著書『言葉と物』の成功で構造主義を代表する哲学者とみられたが、方法的にはニッチな系譜の影響下に「アルケオロジー」という独自の記述・分析手法を開発。これにより、狂気と理性、知と権力などについて歴史的研究を行った。

論じられない。複雑な現代社会の分析ができない。言語にならない人間の深い欲動の部分をどうするか。こうして、G・ドゥルーズとF・ガタリ、J・デリダ、J・クリステヴァ、J・リオタールといったポスト構造主義の人びとが登場する。

ポスト構造主義は、もとの構造主義とどう違うのか。

「ポスト」とは、構造主義を踏まえ、そして乗り越えるという意味である。構造主義の方法は当然として、そのうえで現代社会（二十世紀末の高度資本主義社会）の現実肉薄しようとする。

ポスト構造主義の人びとに共通するのは、現代社会をとらえるのに、形式論理は限界があると考えることである。たとえば、自己言及。「私は嘘つきです」は、もともと単純な自己言及の例だが、形式論理では真偽が決定できない。高度資本主義社会に特有な現象、たとえばバブル経済も、自己言及（みなが値上がりすると思うから値上がりする）の構造を持っている。とすれば、やはり形式論理では歯が立たないのではないか。記号のシステムを形式的に取り扱うだけの構造主義では、十分でないというわけである。

そこから先は、論者によってさまざま。ひとつは、フロイトの自我論や自己生成のモデルなどを下敷きに、形式論理をはみ出すモデルをこしらえること。この方向は、矛盾を基礎に世界を説明しようとしたマルクス主義と、再び接近することになる。わが国のポスト構造主義の思想家たちが、湾岸戦争の際に、旧左翼の人びとと声を合わせて日本の「国際貢献」に反対したのは、このことと関係があるかもしれない。

価値相対の限界

こうしたなか、M・フーコーの仕事が注目される。彼は構造主義とともに登場し、ポスト構造主

構造主義の四天王と呼ばれていたミシェル・フーコー、ジャック・ラカン、クロード・レヴィ・ストロース、ロラン・バルトは、それぞれがそれぞれに微妙な友人および師弟関係にあったけれど、中でも、不思議な縁で結ばれていたのがフーコーとバルトである。

フーコーは、一九五五年八月二十六日、前任者である宗教学者のジョルジュ・デュメジルに代わって、スウェーデンのウプサラ大学に赴任するのだが、実はバルトもまた、そのポジションに応募し、不首尾に終わっていたのだ。

そしてこの二人が初めて知り合うのは、その年の暮れ、フーコーがクリスマス休暇で一時帰国した際に共通の知人に紹介されてであるという。『ロラン・バルト伝』の著者J・J・カルヴェは、こう書いています。二人は、思想や、支配的イデオロ

ギーに対する批判的な姿勢や、そしてもちろん同性愛など、多くの点で似ていた。しかしまた、おそらくそれ以上に多くの点で異なっていた。バルトはむしろ控え目で、華々しさ

この人たちの「証言」

ロラン・バルト

正反対の二人の間の不思議な縁

や自己露出を好まなかったが、フーコーは正反対の性格だった。しかし二人は友人になる。フーコーがパリに立ち寄ったときは、しばしば一緒に夕食をとり、そのあとサン・ジエ

ルマン・ディープブレのナイトクラブに行き、休暇にはたいいていモロッコで落ち合った。だが二人はそれから約十年後、疎遠になってしまふ。「やぐざな仲間」たちとの毎晩のような夜遊びに、仕事に勤勉なフーコーが耐えられなくなったからと、その理由を推測しているのは長年彼と暮らした友人のD・ドゥフルである。

D・エリゴンの『ミシェル・フーコー伝』に「ウプサラで過ごす三年間は彼にとって相当苦しいものとなる。」「雰囲気はきわめて堅苦しく、もったいぶってさえる。つまりルター派の清教徒精神が重く支配しているのだ」とあるけれど、フーコー以上に快楽的な人間だったバルトが、もしその地に赴任していたならば、彼は職務をまっとうすることが出来ただろうか。

義にも大きな影響を与えている。

フーコーは、われわれの知の枠組み、すなわちエビステメーの成立を問題にした。そして、監視や刑罰、告白、規律訓練といった権力の働きが、近代的主体の形成にあずかっていると考えた。歴史学者のフーコーは、そのことを、古典時代や近代初頭といった過去の社会について実証してみせた。

知のあり方がある特定のメカニズムによって構成されるという主張は、自己言及的な知（知がどう作られるかという知）である。その主張を現代社会にあてはめようとする、主張の真偽が決定できなくなる。おそらくそのせいで、フーコーに続こうとしたポスト構造主義の思想家たちは、現代社会に対して積極的な発言ができなくなった。ポスト構造主義は、価値相対主義で、どんな主張もそれなりに成立すると考える。しかも、どれかの主張を肯定したり否定したりできないので、結局、現状維持になる。仕方がないので、最新の知的ファッショに頼って優位を示そうとする。それ以上に進むことがむずかしい。

ポスト構造主義がこうして停滞しているうちにも、冷戦の終結や民族紛争、アジアの金融不安といった新たな変化が続発した。二十世紀末の思想界ではいま、ポスト構造主義のつぎを狙うさまざまな潮流が、しのぎを削っている。その決着がつく二十一世紀に、ほんとうの意味での「ポスト」構造主義の時代が始まるはずだ。

おまけ

『現代』第34巻第5号（2000年5月号）

識者50人が選んだ新世代の旗手200人

（各ジャンルとも推
薦者の五十音順）

政治・地方自治・国際・外交・防衛など

橋爪大三郎（東京工業大学大学院社会理工学研究科教授）政治の部門で橋爪氏を推薦するということには、ご本人を含む誰もが、きっと驚かれると思います。橋爪氏は学者であって、政治家ではありません。私の知る限り、政治家になろうともしておりません。しかし、私は、橋爪氏が政治家として非常に豊かな力を発揮するだろうと確信しております。彼において、ラディカルであることと、現実主義的であることが、みごとに統合されているからです。ラディカルそんなことを言っても、全然、現実化可能な具体性をもったものにまでそれを特定できない人、逆に、現実主義者だけれども、問題を根本から捉えなおす想像力のない人のいずれかに分かれる中、彼のような人はまれだと思います。彼に、たとえば文部大臣をやってもらえれば、日本の学校教育は、そうとうましなものになるでしょう。

〔大澤真幸〕